

## 唐宋における「孝感」物語

### 序

漢代以降、『孝経』が思想書として多くの人々を惹きつけ、注釈や『孝経』の緯書が陸続と作られたように、「孝」についての議論が盛んに行われてきた。「孝」は親を大切にすることにとどまらず、祖先祭祀と結びつくものであり、社会・共同体から子孫に及ぶまで、人々の重要な関心事項であった。また、孝子を顕彰するためでもあるが、「孝」に関する話も積極的に語られ、そして記録されていった。いわゆる『孝子伝』や後の『二十四孝』に収められるような話柄である。これらいわゆる孝子譚は、当時の人々がどのような場、どのような事を「孝」として実感的にとらえていたか、ということも示していよう。

唐代では、玄宗が『御注孝経』において、君主が率先して「孝」を行うことで天下を平らかにし、また臣下はそのような君主を見習っていくものとした。「孝」は神明に通じ、天地万物を動かすものであり、特に天子の「孝」は天下の安寧に結びつくものであった。有徳者を有徳者たらしめるのもまた孝であったと言えよう。ところ

松野 敏之

が宋代以降、特に道学者たちは従来のようには積極的に「孝」を強調しなくなっていく。たとえば朱熹であれば、仁・理・性などを前面に打ち出したことにより、あらゆる道徳の根本として「孝」をとらえるのではなく、孝は仁（理）に至るための端緒、仁（理）の用と位置づけた。「孝」が人倫の重要事項であることに変わりはないが、唐以前に見られるような神明に通じ、天地万物をも動かすものとして強調するのではなく、五倫の実践道徳の一つとして位置づけられていくのである。本報告では、唐以前と宋代における「孝」の位置づけの変遷の中で、孝の物語のとらえ方の変化について注目したい。今回特に注目したいのは、いわゆる「孝感」に分類される孝行譚である。『御注孝経』において玄宗は、天子が君徳を涵養することによって天下を安んじることができると強調したが、天子以外の人々であっても孝心には天地万物を動かす力があるととらえられている。たとえば、後に『二十四孝』にも収められる有名な孟宗や王祥の物語である。孟宗は母の願いをかなえたいがために真冬の竹林で泣き、王祥は鯉を求めて真冬の氷の張った池に飛び込もうとし、それぞれ孝心に感じた天地（神霊）が筍を生やし、鯉が氷を割って飛

び出してきたというものである。あるいは、熊衰が貧しさ故に父の葬儀を出せなくて泣いていたところ、その孝心に感じて銭が雨のように降ってきたという話もある。このような「孝感」の物語は、類書においては『白氏六帖』巻二五、『太平御覧』巻四一・人事部五二、『文苑英華』巻五三七・五三八、『冊府元龜』巻七五七に、それぞれ「孝感」として項目が立てられている。あくまで類書による概観に過ぎないが、孝心によつて天地神明を動かすような孝行譚が「孝感」としてまとめられるのは、唐中期から宋初のこととなる。

この時期に「孝感」として考えられていた孝行譚を、宋代の士人はどのようにとらえたのか。特に道学者たちが「孝」を実践倫理に位置づけていることからすれば、「孝感」のような物語は否定されることが想定できるが、単に否定するだけなのか、あるいは何らかの側面を認めることもあるのか。まずは宋以前にどのような孝感譚があったのかということから確認していきたい。

## 一、孝感

孝について語るのは、本来は純粹に孝子を顕彰するためだったであろう。そこには孝行や勤勉を奨励するという意図も見られる。漢代から王朝による善行ある者の表彰が始まり、特に孝子に対する顕彰は積極的に行われてきた。孝子は旌表の対象者となり、唐代でも恩賞をもらったり、昇進に寄与したり、あるいは課税や徭役が免除されたりすることもあった<sup>四</sup>。そのため、多くの孝子譚が発財や出世という結末に導かれているとも言われる<sup>五</sup>。

あるいは権貴な方の清廉さやすばらしさを顕彰するために孝感が

語られることもある。『白氏六帖』巻二五・孝感には、張九齡の話から「紫芝産坐側白鳩白雀巢樹」の項を立てている。

紫芝産坐側白鳩白雀巢樹 張九齡、遷中書侍郎。以母喪解、毀不勝哀。有紫芝産坐側、白鳩白雀巢于家樹。

紫芝 坐側に産まれ、白鳩白雀 樹に巣づくる 張九齡、中書侍郎に遷る。母の喪を以て解く、毀して哀しみに勝へず。紫芝の坐側に産まれ、白鳩白雀の家樹に巣づくる有り。

張九齡の話柄は『新唐書』巻一二六の張九齡列伝にも見えるものである。母の喪に際し、紫芝が生え、白鳩白雀が家樹に巢を作ったという。孝子の顕彰が、孝行譚に影響を与えていることは事実である。しかし孝行譚には、どのような行為を当時の人々が「孝」とみなしたか、ということが反映されているのも確かであり、中でも特に際立つのが孝感譚となる。

篤い孝心により天地神明や万物が感動することを「孝感」と表現するのは、後漢頃より見られる。『東觀漢記』(一例)、『三國志』(一例)、『搜神記』(一例)、『晋書』(二例)などに、孝心によつて不可思議な事象が起こることを「(時人)以て孝感の致す所と為す」とまとめる。『東觀漢記』に収める次の話は、その早い例である。

長沙有義士古初、遭父喪未葬。鄰人火起、及初舍。棺不可移、初冒火伏棺上、會火滅。以爲孝感所致云。

〔東觀漢記〕卷一六

長沙に義士古初有り、父の喪に遭ひ未だ葬らず。鄰人火起こし、初の舎に及ぶ。棺移す可からず、初火を冒して棺の上に伏し、たまたま火滅す。以て孝感の致す所と為すと云ふ。

父を埋葬する前、隣家で火事が起こったため、火の中に飛び込んで父の棺（亡骸）を守ろうとしたところ、偶然にも火が消えたというものである。『孟子』における孝の話題も喪に関するものが多いように、孝に関する話においても服喪や親の死に関わる話は多い。一方、生きている親を大切に、孝養を尽くすということでも孝感に類せられる話はある。王祥の話もその一つである。

祥性至孝。早喪親、繼母朱氏不慈、數譖之、由是失愛於父。每使掃除牛下、祥愈恭謹。父母有疾、衣不解帶、湯藥必親嘗。母常欲生魚時、天寒冰凍、祥解衣將剖冰求之、冰忽自解、雙鯉躍出、持之而歸。母又思黃雀炙、復有黃雀數十飛入其幙、復以供母。鄉里驚歎、以爲孝感所致焉。〔『晋書』卷三三・王祥伝）

祥性は至孝。早に親を喪ひ、繼母の朱氏は不慈、しばしば數之を譖し、是れに由りて愛を父に失ふ。毎に牛下を掃除せ使むるも、祥いよいよ愈恭謹。父母に疾有れば、衣は帶を解かず、湯藥は必ず親みづから嘗む。母常て生魚を欲せし時、天寒く冰凍す、祥衣を解き將に冰を剖きて之を求めんとせしとき、冰忽として自ら解け、雙鯉躍出す、之を持って帰る。母又た黄雀の炙を思へば、復た黄雀數十の飛びて其の幙に入る有り、復た以て母に供す。郷里驚歎し、以て孝感の致す所と為す。

母のために王祥が氷の池に入ろうとしたところ、二匹の鯉が踊り出てきたことは、後に『文選』や『二十四孝』にも収められ、有名な孝行譚となる。日頃から父母に孝養を尽くし、母の望みをかなえたいと切に願う孝子の心に、天地神明が感動して、あるいは動植物が感応してその孝子に幸いをもたらす。このような孝感に類する話は、他にどのようなものがあるうか。類書の中で孝感類が立てられている『白氏六帖』卷二五、『太平御覽』卷四一・人事部五二、『冊府元龜』卷七五七・総録部を概観すると、圧倒的に「喪」に関わる話が多い。

	『白氏六帖』	『太平御覽』	『冊府元龜』
・服喪・親の死に関わる話	全42話	全60話	全118話
・親の希望を叶える話	5話	8話	7話
・病いに関わる話	2話	16話	27話
・その他	16話	5話	18話

三書の孝感類に共通して収められている話柄は、姜詩・方儲・王祥・呉隱之・劉殷・王延の六話のみであり、他の話題は重複していない。「服喪・親の死に関わる話」の多くは、親が亡くなり、孝子が悲しむことによって動物や植物が感応するというものである。たとえば、次のような話である。

陳孝意、大業中爲侍御史。以父憂去職、居喪過禮、有白鹿馴擾其廬。時人以爲孝感之應。〔冊府元龜〕卷七五七）  
陳孝意、大業中侍御史と爲る。父の憂ひを以て職を去り、喪に居ること過礼、白鹿有り其の廬に馴擾す。時人以て孝感の応と爲す。

父を亡くしたことを悲しむ陳孝意の孝心に、白鹿が感動し、服喪中の廬に居着いたというものである。<sup>7)</sup>このように動物がなついたり、鳥が集まったりすることで、孝心の篤さが語られることは多い。他にどこで亡くなったか分からない親の亡骸を探し求めて見つける話や、遠方で亡くなった親の亡骸を無事に郷里に運ぶ話などを含めれば、親の死に関わる話は圧倒的に多い。すなわち、宋初以前において孝心が実感されるのは、親の死や服喪において多かつたということである。換言すれば、孝とはやはり祖先祭祀との関わりが重視されてきたということでもあろう。

服喪・親の死以外では、親の望みをかなえるべく努力する話（先代の王祥の話など）や、孝子の心により親や自分の病いが治る話が見られる。「その他」としてまとめたのは、父母への孝心から金銭や食糧などの即物的な利益を得る話、盗賊が孝子に感動する話、猛獣から父母を助ける話などである。以下、節を改め、これらの話について検討していく。

## 二、喪

先に確認した通り、孝感に分類された話としては、服喪中の孝子のところに動物が居着いたり、墓作りを手伝ってくれたり、あるいは孝子の家に植物が生えたりすることが多い。これらの話に見える動物としては、鳥・群鳥・赤鳥・雀・黄雀・白雀・鶴・白鶴・梟・白鵲・白雉・雁・鳥・鹿・白鹿・白兔・虎・鯉・白鼠が、植物としては紫芝・甘露・松柏や木に連理が結ばれることなどが見られる。色に「白」が多く語られるのは、当然ながら「喪」の連想からであろう。元の白珽は次のように述べている。

古孝親之感以致物之異多白。故劉殷白雁、林攢白鳥、程袁師白狼、梁文貞白兔、而詩之素冠白華、可見。

〔湛淵集〕「木齋王公孝感白華頌」

古、孝親の感じて以て物を致すの異に白多し。故に劉殷の「白雁」、林攢の「白鳥」、程袁師の「白狼」、梁文貞の「白兔」、而して『詩』の「素冠」「白華」、見る可し。

喪において孝子の心は明確になるものであり、そのような時に孝心に感動した動物や植物が日常では起こりえない現象を起こす。服喪・廬墓は、孝を実感する場として考えられてきた。そのため親の死という設定が孝子譚のテキストに反映されることもある。一例として孟宗の物語をとりあげたい。孟宗が母のために筍を欲して真冬の竹林に入り、哀歎したところその孝心に感じて筍が生えてきたという有名な孝行譚である。<sup>8)</sup>この話には母が亡くなっているかどうか、生母か後妻かなど、若干の違いが見られる。思い込みや創作がまぎれこみやすいものとして、類書の異同が分かりやすいため、参考と

して挙げる。孟宗の話は、裴松之が『三国志』に引用した『楚国先賢伝』に見られるものが早い時期のものとなる。現行本『三国志』卷四八・呉書・孫皓伝に引く裴松之の注では次のように記されている。

楚国先賢傳曰、宗母嗜筍。冬節將至、時筍尚未生。宗入竹林哀嘆、而筍爲之出、得以供母。皆以爲至孝之所致感。

『楚国先賢伝』に曰く、「宗の母 筍を嗜む。冬節將に至らんとし、時に筍尚ほ未だ生ぜず。宗 竹林に入りて哀嘆す、而して筍之が為に出で、以て母に供するを得たり。皆な以て至孝の感を致す所と為す」と。

『蒙求』にもこれと同じ内容が収められているが、『芸文類聚』卷八九・木部・竹や『太平御覽』卷二六・時序部・冬に引く孟宗の話は、「及母亡」が加わり、筍を供するのも「祭（祭祀）に供することとなる。すなわち、『芸文類聚』『太平御覽』では孟宗の母は真冬に亡くなったとされ、孟宗は亡き母が好きだった筍をお供えしたいがために竹林に入ったということになる。孝が実感される場として親の死があり、それが物語を改変することの一例でもある<sup>九</sup>。

このような孝感に分類される孝行譚は宋代の士人たちはどのようにとらえているのか。『宋史』卷四五六・孝義伝や『元史』卷一九七・孝友伝では、喪に居りて墓に廬する者が孝子としてあげられている。親の服喪に「孝」が強く実感されることに変わりはない。しかし、そこで語られる瑞祥には多少の違いがうかがえる。

『宋史』卷四五六・孝義伝にも、「孝義の感ずる所、醴泉、甘露、

芝草、異木の瑞、史 書すことを絶たず、宋の教化に觀るに足る者有り」とある通り、瑞祥として植物が感応することに変わりはないが、動物を語ることは少なくなる。廬・墓に変化があるからかもしれないが、唐代までのように親の墓の傍らで暮らす孝子のもとに動物が集まってきたという話は減っていく。

またいま一つ、異なる傾向も見受けられる。もともと多くの記録があるわけではないが、親の喪に服す孝子譚には、「性至孝」と記すのみで具体的な孝養については語られず、服喪の折に起こった瑞祥だけが記されているものもある。先に挙げた張九齡や陳孝意もその例となる。これらは当然、瑞祥が起こること自体が孝心の篤さを示しているため、具体的な孝養については記す必要がなかったであろうし、また旌表の観点からすれば服喪の瑞祥だけが報告されたためでもある。いずれにしる宋代以降になると、このような服喪の折に瑞祥が起こったというだけの話はほとんど採りあげられなくなる。たとえば、先の三類書の孝感類に共通して見られる姜詩・方儲・王祥・呉隱之・劉殷・王延の六人は宋初以前にはそれぞれ孝子として知られた存在であったと思われる。このうち姜詩・王祥・劉因・王延については、司馬光『家範』、朱熹『小学』、胡炳文『純正蒙求』などに収められているが、墓の傍らに廬を結んで瑞祥が起こったことだけが記される方儲・呉隱之については触れられない。

服喪に際して瑞祥が起こったという話は、孝感譚としては圧倒的な比率を占めるものではあるが、士人たちからはとりあげられなくなっていくのである。このことは、その人物が服喪に際して瑞祥の起こるような孝子であるかどうかということよりも、父母に対して具体的にどのような孝養を尽くしたかという話が注目されるという

ことでもあろう。

### 三、郭巨

孝感に分類された話の中には、数は多くないものの即物的な応報譚が見える。貧しいが故に父の葬儀を出せなくて孝子が泣き、銭が雨のように降ってきた話や、飢饉に見舞われ地中から米を手に入れた話などである。また、郭巨は家が貧しく母を養うために子供を生き埋めにしようとして穴を掘ったところ、黄金が出てきたという話もある。郭巨の話は、『孝子伝』や『搜神記』、『蒙求』や『二十四孝』に見られ、知られたものであったが、宋代の士人で郭巨に言及するものはほとんど見当たらないが、司馬光は『家範』の中に郭巨の話の収めている。

後漢郭巨家貧養老母。妻生一子、三歳母常減食與之。巨謂妻曰、貧乏不能供給。共汝埋子。子可再有、母不可再得。妻不敢違。巨遂掘坑二尺餘、得黄金一釜。或曰、郭巨非中道。曰、然。以此教民、民猶厚於慈、而薄於孝。 (『家範』卷五・子下)

後漢の郭巨は家貧にして老母を養ふ。妻一子を生み、三歳にして母常に食を減らして之に与ふ。巨妻に謂ひて曰く、「貧乏にして供給する能はず。共に汝子を埋めよ。子は再び有る可くも、母は再び得可からず」と。妻敢へて違はず。巨遂に坑を掘ること二尺余りにして、黄金一釜を得たり。或いは曰く、「郭巨は中道に非ず」と。曰く、「然り。此を以て民を教ふる

は、民猶ほ慈に厚くして孝に薄ければなり」と。

郭巨が母親を養うために子を埋める決意をし、そのための穴を掘っていたところ、黄金一釜を見つけた。『孝子伝』や『搜神記』ではこの後、「天孝子郭巨に賜う」との丹書が現れる。黄金は天が郭巨に与えたものであることが記され、多くの物語はここで終わる。しかし、司馬光の『家範』は丹書のことを記さず、替わりに郭巨の話に対する簡単な解説を附す。親をとるか、子をとるか、貧しさ故に両者を十分に養うことのできない郭巨は親(孝)を選んだ。子を生き埋めにするという選択が批判されるのは当然かもしれないが、『家範』では郭巨の話は民衆を教化するためのものという側面を強調する。それは当時の民衆が子に慈愛の情を注ぐことを優先し、親への孝がおろそかになることが多いが故に、郭巨の話が語られたと指摘するものであろう。最後の文章は司馬光自身の記述かどうか判断としないが、管見の限り、郭巨の話に「或曰」以下の二十二字が見られるのは『家範』のみである。ここでの関心は、孝心によって黄金が得られたこと(孝感)にはなく、民が慈に厚く孝に薄いからこそ、郭巨の話が活きてくるということであり、孝と慈のバランスに注目した人倫の話題として見ていると言えよう。

宋以降になるが、明の方孝孺も郭巨の話をとらあげ、無事の幼子を殺そうとすることに疑義を呈している(『遜志齋集』卷五・「郭巨」)。即物的な応報譚の中でも、郭巨の話は、親をとるか、子をとるかという葛藤が、孝・慈・愛の実感として重視され、関心を持たれたということがあろうである。

#### 四、庾黔婁

孝子の心によつて病が治るといふ話は、管見の限りではあるが、六朝時代以降、徐々に増えていく。たとえば次のような話である。前者は自分の病が治る話、後者は母親の病が癒える話である。

又永興概中里王氏女、年五歳、得毒病、兩目皆盲。性至孝、年二十、父母死。臨屍一叫、眼皆血出。小妹娥舐其血、左目即開。時人稱爲孝感。縣令何曇秀不以聞。

〔南齊書〕卷五五・孝義・韓靈敏伝(二二)

又た永興概中里の王氏の女、年五歳にして、毒病を得、兩目皆盲たり。性は至孝、年二十にして、父母死す。屍に臨みて一叫し、眼皆な血出づ。小妹娥其の血を舐むれば、左目即ち開く。時人稱して孝感と爲す。県令の何曇秀以て聞せず。

翔少有孝性。爲侍中時、母疾篤。請沙門祈福、中夜忽見戶外有異光、又聞空中彈指、及曉疾遂愈、咸以翔精誠所致焉。

〔梁書〕卷四一・褚祥伝(二三)

翔少くして孝性有り。侍中爲りし時、母の疾篤く、沙門に祈福を請ふ、中夜忽として戶外に異光有るを見、又た空中に彈指を聞く、曉に及び疾遂に愈ゆ、咸おも以へらく翔の精誠の致す所と。

孝子の孝心により、眼が見えるようになったり、危篤の状態から

回復したというものである。他にやや系統の異なるものとしては、遠方にいる父母・祖父母の病などを孝子が察知するというものもある。『搜神記』には、孝で知られる曾子（曾參）が、旅中であつて胸騒ぎを覚え、急ぎ帰国すると、母親が子供（曾子）のことを思つて指を噛んだという話がある。孝子は遠方にあつて親の思いを察知することあるという発想であり、その延長になるのが親の病いを察知することである。『二十四孝』にも収められる庾黔婁は、赴任先で父親の大病を察知したという話が伝わる。宋の士人では、司馬光が『家範』に、朱熹が『小学』にこの庾黔婁の話柄を収めている。

南齊庾黔婁、爲辱陵令。到縣未旬、父易在家遭疾。黔婁忽心驚、舉身流汗。即日棄官歸家、家人悉驚其忽至。……至夕每稽顙北辰、求以身代。俄聞空中有聲、曰、徵君壽命盡、不可延。汝誠禱既至、改得至月末。晦而易亡。

〔家範〕卷四・子

南齊の庾黔婁、辱陵令と爲る。県に到りて未だ旬ならずして、父易家に在りて疾に遭ふ。黔婁忽かに心驚き、身を挙げて流汗す。即日官を棄てて家に帰る。家人悉く其の忽かに至るを驚く。……夕べに至れば毎に北辰に稽顙し、身を以て代はらんことを求む。俄かに空中に声有るを聞く、曰く、「徵君の寿命尽く、延ばす可からず。汝の誠禱既に至る、改め得て月末に至らしめん」と。晦にして易亡す。

庾黔婁は胸騒ぎを憶えて赴任したばかりの官を辞して帰郷すると、故郷にいる父が重い病を患っていた。庾黔婁が毎夜父のために祈つたところ、空中から突如として「本来なら寿命が尽きていると

ころ、お前（庾黔婁）の誠禱によつて月末まで延ばす」との聲が聞こえてきて、その通りに父が亡くなったというのである。『家範』は、『梁書』卷四七・庾黔婁伝や『二十四孝』とほぼ同文を収めるが、朱熹は『小学』に収める際に些か改編を加えている。朱熹は『家範』も参考にして『小学』を編纂しているため、庾黔婁の話を『梁書』や『家範』と同じように収録していてもおかしくないが、『小学』善行篇・15章では末尾の「俄かに空中に声有るを聞く、曰く、  
 “微君の寿命尽く、延ばす可からず。汝の誠禱既に至る、改め得て月末に至らしめん”と。晦にして易亡す」の部分を削除した。庾黔婁が遠方にあつて父の病いを察知し、父のために手厚く看病して毎夜禱つたという<sup>(四)</sup>ことで話を終えているのである。

この庾黔婁の物語については、『小学』を読んだ陳淳（朱熹の弟子）からも疑義が呈されている。『朱文公文集』の中には、陳淳に対する書簡が次のように見える。

小學載庾黔婁父病、每夕稽顙北辰、求以身代。而全文此下更云數日而愈。不審果有此應之之理否。若果有應之之理、則恐是父子一氣、此精誠所極、則彼既餒之氣因復爲之充盛否、抑此適遭其偶然、而實非關於禱、實無轉天爲壽、轉禍爲福之理。人子於此雖知其無應之之理、而又却實行其禮、則恐心足不相似。

禱是正禮、自合有應、不可謂知其無是理、而姑爲之。

〔朱文公文集〕卷五七・答陳安卿（二）

〔陳淳〕『小學』に載す「庾黔婁の父病み、毎夕北辰に稽顙し、身を以て代はらんことを求む」と。而して全文此の下に更に云ふ「數日にして愈ゆ」と。審らかならず果たして此の之に

応ずるの理有るや否や。若し果たして之に応ずるの理有れば、則ち恐らくは是れ父子の一氣、此れ精誠の極むる所なれば、則ち彼既に餒うるの氣因りて復た之が爲に充盛するや否や、抑はた此れ適に其の偶然に遭ひて、実に禱に関するに非ず、実は天を転じて寿と爲し、禍を転じて福と爲すの理無きか。人子此に於いて其の之に応ずるの理無きを知ると雖ども、而れども又た却て実に其の礼を行ふは、則ち恐らくは心足相ひ似ず。  
 「朱熹」禱は是れ正礼、自ら合に応有るべし、其の是の理無きを知りて姑く之を爲すと謂ふ可からず。

『梁書』庾黔婁伝では月末まで延命し、その通りに亡くなったことが記されているが、陳淳が見た庾黔婁の話は、禱りによつて父の病いがあるが、庾黔婁が父のために禱り、空中から声が聞こえてくるといふ話を、朱熹は『小学』に収める際には削除した。陳淳との問答からすれば、朱熹はこの庾黔婁の話を、孝子の心に天神が感応したものと見て見ていたのではなく、禱りという心的態度に注目していたようである。<sup>(五)</sup>孝子の物語としては、赴任先で胸騒ぎを憶えて帰郷すると、父の重病を知り、手厚い看病を施し、父のために禱つたといふことで完結させた。朱熹以後、庾黔婁の話を採りあげたものの中で、元・胡炳文『純正蒙求』卷上、明・彭大翼『山堂肆考』卷七七・「父疾棄官」、明・劉宗周『人譜類記』卷上などは、朱熹『小学』と同じく「俄聞空中有聲……至月末」を省略する。空中から声が聞こえてくるということに「孝」が実感されないということでもあろう。



なお、病氣回復に関する孝感譚自体は漢代よりも六朝・唐・宋初にかけて増えていくが、先に挙げた「王氏の女」のように、「性至孝」であった娘が親の死を契機として両眼が見えるようになったという話は、宋代以降の士人たちに注目されることはあまりない。庾黔婁のように、いかに看病したかという話をとりあげることはあっても、「至孝」であったが故に、親や自身の病氣が回復したというだけでは実践道徳の孝としては実感が持たれないであろう。

## 五、王祥

先に見た孟宗の場合、母の好きだった筍を求め、真冬にも拘らず筍が生えてきたというものであった。父母の願いをかなえるべく、父母に孝養を尽くすという話である。他に父母の要望として見られるのは、魚や水に関するものである。姜詩の話は『東觀漢記』巻一七に見え、古くから知られたものである。母が好きな江水を、日々母のために息子に汲みに行かせていたが、その息子が不幸にも溺死してしまった。息子を悼み、年々衣を長江に捧げていたところ、家の側らに泉が湧き出た。それは母の好む長江と同じ味のする水であり、しかも毎日なぜか二匹の鯉がとれたという。

姜詩や氷の張った池で魚を得た王祥の話は有名なものではあるが、宋以前の孝行譚の比率としては多くない。それが宋以降になると、孝子の家に泉が湧き出たり、魚の棲まない井戸や池から魚がとれる話が見られ、「孝感泉」や「孝感井」等と呼ばれる。これは士人にも共有される感覚だったようである。南宋の王十朋は自邸にあ

る井戸について、孝感に関する話を記している。

宣和壬寅、大父得疾、服藥思鯽魚。時方盛暑、不可遽致。先人憂見顔色、遂垂釣于井獲巨鱗。予時年十有一、侍立井旁、親見之。井初無魚。先人素不善釣。蓋孝感也。

（『梅溪前集』巻一七・大井記）

宣和壬寅、大父疾を得、藥を服し鯽魚を思ふ。時に方に盛暑にして、遽かに致す可からず。先人憂ひて顔色を見、遂に釣を井に垂れ巨鱗を獲たり。予時に年十有一、井の旁に侍立し、親ら之を見る。井は初めより魚無し。先人素より釣を善くせず。蓋し孝感なり。

王十朋は十一歳の頃、病氣の祖父のために父が魚のいない井戸で「巨鱗」を釣り上げたと言う。王十朋は当時、子供ではあったが、父親の孝心と魚が釣れたことを結びつけて考えている。泉が湧くことや魚がとれることが、孝心の篤さを示すこととして語られるのである。

また、氷の張った真冬に魚を手に入れた王祥についても肯定的な見解がある。北宋・程頤が『孝経』と王祥の孝感譚を結びつけて論じているのである。

問、天地明察、神明彰矣。曰、事天地之義、事天地之誠、既明察昭著、則神明自彰矣。問、神明感格否。曰、感格固在其中矣。孝弟之至、通於神明。神明孝弟、不是兩般事。只孝弟便是神明之理。又問、王祥孝感事、是通神明否。曰、此亦是通神明一事。

此感格便是王祥誠中來、非王祥孝於此而物來於彼也。

〔二程遺書〕卷一八)

問ふ、「天地明察なれば、神明彰はる」と。曰く、「天地の義に事へ、天地の誠に事へ、既に明察昭著なれば、則ち神明自ら彰はる」と。問ふ、「神明は感格するや否や」と。曰く、「感格は固に其の中に在り。孝弟の至は、神明に通ず。神明・孝弟は是れ兩般の事ならず。只だ孝弟は便ち是れ神明の理」と。又た問ふ、「王祥孝感の事は、是れ神明に通ずるや否や」と。曰く、「此れも亦た是れ神明に通ずるの一事なり。此れ感格は便ち是れ王祥の誠中より来る、王祥の此に孝にして物の彼より来るに非ざるなり」と。

『孝経』の「天地明察なれば、神明彰はる」についての質問から、同じく『孝経』の「孝弟の至は、神明に通ず」と王祥孝感の話を結びつけて論じており、程頤は王祥の話を孝弟の心が神明に通じる例としてとらえている。それが朱熹に至ると、同じ話題を採り上げながら、異なる解釈をしていく。

問、王祥孝感事、伊川説如何。曰、程先生多有此處、是要說物我一同。然孝是王祥、魚是水中物、不可不別。如說感應、亦只言己感、不須言物。

〔朱子語類〕卷九七・92条)

(鄭可学) 問ふ、「王祥孝感の事、伊川説くこと如何」と。(朱子) 曰く、「程先生多く此の処有り、是れ要(かなら)ず物我一同を説く。然れども孝は是れ王祥、魚は是れ水中の物、別たざる可からず。如し感應を説くならば、亦た只だ己感ずと言ひ、

須らく物を言ふ可からず」と。

朱熹は王祥の話柄を、自身が編纂した『小学』善行篇・11章に収める。善行篇の9章から18章までは父子の孝に関する話をまとめたものであり、王祥の話柄も孝の事として整理している。しかし、『語類』の問答からすれば、朱熹は王祥の物語を、そのまま孝に感応して魚が現われたとは解釈していない。朱熹からすれば、程頤が王祥孝感を容認したのも「物我一同」を論じるためであり、決して孝感を認め、積極的に語ったものではないということになるであろう。また程頤が王祥孝感の話柄と結びつけて採りあげた『孝経』の「孝弟の至は、神明に通ず」の一文であるが、朱熹はそもそも『孝経刊誤』の編纂において、程頤の言う『孝経』の一文を経文ではなく、伝文に位置づけている。当然ながら、程頤と朱熹の王祥の物語に対する見解の相違は、「孝」に対する考え方の違いでもある。「孝」を五倫の実践道徳と位置づける朱熹からすれば、「孝」に過度な重みを持たせることを警戒するからであろう。

## 結び

本報告では、孝の物語のなかの一端として、孝子の心が天地万物を感動させ、瑞祥をもたらすという孝感譚について、唐以前の類例と宋代士人のとらえかたを概観した。

司馬光『家範』のように比較的多くの孝感譚を収めることもあるが、多くの士人たちは、孝感に関するような話は人倫道徳から乖離

したものとして言及しない。唐以前に多く見られた、服喪中の孝子に瑞祥が起こるといふ話は積極的に論じられないのである。なお、類書の中で孝感類が立てられているのも『太平御覧』『冊府元龜』までであり、それ以降には見られない。その後の類書では、宋初以前の孝感譚は関連するそれぞれの項目に分類されていく。たとえば、孟宗であれば竹部に、郭巨であれば宝部に収められることになる。

また孝子の心に感動して天が金を降らせたり、地中から金や米を見つけさせたりするという即物的な応報譚についても言及は少ない。ただ母を養うために子を生き埋めにしようとした郭巨の話などは、金を手に入れたかどうかではなく、母をとるか、子をとるか、孝か慈かという人倫の問題として受けとめられることはあった。人倫道德の孝感として考える余地のある物語がとりあげられたのである。

特に朱熹の場合は、自覚的に「孝」を人倫道德として位置づけ、孝感に見られるような「孝」が天地万物に影響を与えるとする話を避ける。しかし、他の士人のように一切言及しないのではなく、物語によっては朱熹なりの論点にひきつけることによってとりあげている。病いの父のために禱った庾黔婁の話は、『小学』に収めているが、その際に「禱」の後に見える空中から声が聞こえてきたことと禱りによって父の病いが回復したという一節は削除している。父のために禱ったというところで話を止め、孝子の禱りという観点から庾黔婁に注目するのである。また、氷の張る真冬に魚を手に入れた王祥についても、『小学』に収めているが、程頤が評価したように孝感譚としてはとらえず、物我一同の例として受け入れた<sup>200</sup>。

最後に、本報告では孝感の話題ごとに整理したが、時間軸で見た

場合、士人における孝感譚の受け止め方は北宋と南宋が分岐となるように感じられる。象徴的なのは、神明に通じる「孝」を前提として王祥孝感を論じる程頤と、それを否定する朱熹とでは孝感の実感にも隔たりがあるであろう。当然ながら孝感に実感を抱く士人と否定的にとらえる士人とは孝や祭祀の解釈にも違いが出て来ると考えられる。本報告では孝に関連する一端を採りあげただけであり、孝感譚と家・宗族の孝との結びつきなど今後の課題としたい。

《注》

- (一) 桑原隲蔵『中国の孝道』（講談社、一九七七年七月）、加地伸行『孝研究——儒教基礎論（加地伸行著作集Ⅲ）』（研文出版、二〇一〇年一〇月、二九四頁）参照。加地氏は、孝の要素として（一）祖先祭祀、（二）子孫一族の繁栄、（三）子の親に対する愛・敬の三要素にまとめる。
- (二) 詳しくは、【報告二】青木洋司「南宋末における『論語集注』学而篇「孝弟也者、其為仁之本与」章解釈」、【報告三】原信太郎アレシヤン「明代における『論語』学而篇「孝弟也者、其為仁之本与」章解釈——陽明学者を中心として——」を参照。
- (三) 『漢書』卷八・宣帝紀。小竹文夫「中国の門閭旌表について」『史潮』四五号（一九五二年六月）、酒井恵子「孝子から節婦へ——元代における旌表制度と節婦評価の転換——」『東洋学報』八七卷四号（二〇〇六年三月）参照。
- (四) 類書の孝感類にも課税や徭役の免除につながる話がいくつか見える。たとえば、『冊府元龜』卷七五七に、「韋宏宗、巴西人。葬父母、廬墓次、廬前生芝草七十餘莖。見者以為孝感。詔免其課。」とある。
- (五) 竹田晃「六朝志怪に語られる『人間』」『東京大学人文科学科紀要』

五一輯（国文学・漢文学XV）（一九七〇年二月）参照。

(六) 『魏書』にも孝感伝が立てられているが、多くが為政者を感動させた話であり、「孝感の致す所」と表現される「孝感」とは異なるため採りあげなかった。

(七) 陳孝意の伝は、『北史』巻七一、『隋書』巻七一に立てられており、『冊府元龜』は『隋書』に基づく。

(八) 類書の孝感類としては、『白孔六帖』巻二五、『冊府元龜』巻七五七に収める。

(九) なお、思い込みや創作の入り込む例として、孟宗の物語については、『白孔六帖』巻二五、宋・陳元靚『歳時広記』巻四では孟宗の母は「後母」となり、さらに『二十四孝』や明人撰『江漢叢談』巻二では、母は病氣ということになっている。孟宗は病氣の母のために筍を求め、筍で羹を作ったところ母の病いが癒えたというのである。

(一〇) 孝感としては、『白氏六帖』巻二五、『太平御覽』巻四一一に収める。

(一一) 郭巨の物語には様々な変遷・改変があり、そこには「孝」に対する人々の実感も投影されている。郭巨説話の変遷を丁寧に行った研究に、宇野瑞木『孝の風景』（勉誠出版、二〇一六年二月）がある。

(一二) 『南史』巻七三・孝義上および『太平御覽』巻四一一にも収められる。

(一三) 『南史』巻二八および『冊府元龜』巻七五七に収める。

(一四) 拙稿「宋代訓蒙書と朱熹『小学』」『國學院雜誌』一一七巻一一号（通巻一三二五号）（二〇一六年一月）参照。

(一五) 『梁書』巻四七・庾黔婁伝「汝誠禱既至、止得申至月末。及晦而易亡。」

(一六) 陳淳はこの時の朱熹の返答をふまえ、次のような論を記している。  
陳淳『北溪大全集』巻六「禱是正理」。「前承教子路請禱處云、禱是正理、自合有應。嘗思之、周公請命而王乃瘳、成王出郊而天反風、耿恭拜井而泉出、庾黔婁稽顙北辰而父疾愈、與王祥雙鯉、姜詩井魚等類。其所以必如是而無不應者、只爲天地間、同此一理、同此一氣。理所以統乎

氣、而人之心、則又爲理氣之主而精靈焉、隨其所屬小大分限。但精誠所注之處、懇切至極、則是處理強而氣充。凡我同氣類而屬吾界分者、自然有相感通、隨而湊集之以此見實理、在天地間、渾是一個活物、端若有血脈之相關者矣。雖然、亦或有不能必其然者、蓋必然而無不應者、理之常也。或不能必然者、則非其常、而不可以常法責也。故君子惟自盡其所當爲、而不可觀其所難必。」

(一七) 【報告四】許家晟「花咲く「孝」——江戸初期をめぐる——」「一思想としての孝」で指摘する孝感を認める熊沢蕃山も『孝経』の「天地明察、神明彰矣」に独自の解釈を加える。

(一八) 『朱子語類』ではもう一条だけ王祥への言及があり、王祥の話は「理一分殊」を考究する端緒ともとらえている（巻一三二六・35条）。拙稿前掲論文参照。

(一九) 『孝経刊誤』については、加地伸行氏前掲書および緒方賢一『中国近世士大夫の日常倫理』第三章第二章「朱熹と『孝経刊誤』」（中国文庫、二〇一四年三月）参照。

(二〇) 王祥と同じく王延も盛冬に母の求める生魚を手に入れたという話があり、孝感類に収められている。朱熹はこの王延も孝の例として『小学』巻六・善行に収めているが、ここでは「晉西河人王延、事親色養。夏則扇枕席、冬則以身温被。隆冬盛寒、體常無全衣、而親極滋味」と記すのみで、真冬に生魚を得た話は採りあげていない。